

日本国内のタランチュラ飼育におけるハンドリング(手乗り)のリスク評価および社会的・法的妥当性に関する包括的調査報告書

1. 序論: タランチュラ飼育の現代的文脈と課題

1.1 研究の背景: エキゾチックアニマル市場の拡大と飼育スタイルの乖離

21世紀に入り、日本国内におけるペット市場は多様化の一途をたどっている。かつては犬や猫、小鳥といった伝統的な伴侶動物が主流であったが、近年では爬虫類・両生類、そして節足動物を含む「エキゾチックアニマル」の飼育が、ニッチな趣味の枠を超えて一般層へと浸透しつつある。中でもオオツグモ科(Theraphosidae)、通称「タランチュラ」は、その造形美、多様な色彩、そして比較的省スペースでの飼育が可能であることから、都市部の住宅事情に適したペットとして注目を集めている¹。

この人気拡大の背景には、SNS(Social Networking Service)や動画共有プラットフォームの普及が大きく寄与している。YouTubeやInstagram、TikTokなどのメディアを通じて、世界中の飼育環境や個体の様子が瞬時に共有されるようになった。しかし、ここで一つの重大な「文化摩擦」が生じている。それは、欧米諸国(特に北米)のコンテンツに見られる「ハンドリング(Handling)」、すなわちタランチュラを素手に乗せて遊ぶ行為と、日本国内の専門家や熟練愛好家が提唱する「観察重視(Look but don't touch)」の飼育スタイルとの間の著しい乖離である¹。

海外の映像では、大型のタランチュラが飼い主の手や腕を這う様子が「慣れている」「大人しい」として肯定的に描写されることが多い。これを見た日本の初心者が、「タランチュラは手乗りができるペットである」という誤った認識を持ち、安易に模倣しようとする事例が後を絶たない。しかし、日本国内の主要な専門店やブリーダー、有識者は、一貫してハンドリングを「非推奨」あるいは「厳禁」としている¹。

1.2 本報告書の目的と構成

本報告書は、なぜ日本という特定の社会的・法的・環境的コンテキストにおいて、タランチュラのハンドリングが強く忌避されるのかを、多角的な視点から徹底的に分析・検証することを目的とする。

その分析対象は、単なる「咬まれるリスク」といった表層的な問題に留まらない。タランチュラという生物が持つ解剖学的・生理学的な脆弱性、人間側の医学的リスク(特にアレルギーや眼科的疾患)、日本独自の法規制(動物愛護管理法や特定外来生物法)における位置づけ、そして近隣社会との関係性や「迷惑」の概念を含む社会学的要因に至るまで、網羅的に調査を行う。

本調査では、提供された多数の資料(専門店の飼育マニュアル、公的機関の報告書、ニュース記事、医学的知見等)を基に、ハンドリングという行為が孕む潜在的な危険性を構造化し、日本国内における「適切なタランチュラ飼育のあり方」を提言する。なお、本報告書において「ハンドリング」とは、

飼育管理上必要不可欠な移動作業(メンテナンス)とは明確に区別し、愛玩目的や撮影目的、あるいは単なる好奇心から意図的に生体を素肌(主に掌や腕)に乗せる行為と定義する。一方、清掃やペアリングのために道具を用いて生体を非接触で移動させる行為は「メンテナンス」または「移送」と呼び、これを区別して論じる⁵。

2. 生物学的・生理学的観点に基づく生体リスクの詳細分析

タランチュラを素手で扱うことの是非を論じる上で、最も根源的な判断基準となるのは、その生物学的特性である。タランチュラは数億年の進化を経て現在の形態に至っているが、その進化の過程において「巨大な哺乳類に持ち上げられる」という状況に適応する形質は獲得していない。

2.1 外骨格の構造的脆弱性と落下物理学

タランチュラは強固な外骨格を持つように見えるが、その防御力は外敵からの攻撃(刺突や切断)に対して特化しており、高所からの落下による衝撃には極めて脆弱である。特に、生命維持の中樞機能が集中する腹部(オピストソーマ)の構造的弱点は、ハンドリングにおける最大のリスク要因となる。

2.1.1 開放血管系と腹部破裂のメカニズム

クモ類の循環系は開放血管系であり、血液に相当する体液(ヘモリンフ)が体腔内を満たしている。タランチュラの脚の運動は、筋肉の収縮だけでなく、この体液の油圧(turgor pressure)によって制御されている。腹部は、消化器系(中腸腺)、生殖器系、そして心臓(背脈管)を内包する袋状の構造であり、これを覆う外皮は他の部位に比べて薄く、伸縮性がある。

ハンドリング中にタランチュラが驚いて跳躍したり、飼い主が驚いて手を払いのけたりした場合、生体は落下する。人間の掌の高さ(約1メートル前後)からの落下であっても、地表棲の大型種(バードイーター等)にとっては致命的となる。

資料7および8が示唆するように、体重の軽い小型の昆虫(アリなど)であれば空気抵抗によって終端速度が低く抑えられ、落下しても無傷であることが多い。しかし、タランチュラ、特に成体はその体重ゆえに落下エネルギーが大きく、着地時の衝撃が腹部の弾性限界を容易に超える。その結果、腹部が物理的に破裂(Abdominal rupture)し、内臓と体液が流出する⁷。

2.1.2 治療困難性と致死率

腹部破裂による体液喪失は、即座に血圧低下を招き、脚を伸展させる機能を奪う。人間や犬猫のように皮膚を縫合して止血することは、クモの外骨格の性質上極めて困難である。専門的な獣医療において、シアノアクリレート系接着剤(医療用瞬間接着剤)等を用いた応急処置が試みられることはあるが、成功率は低く、多くの場合は感染症や脱皮不全、あるいは循環不全により死に至る⁴。つまり、ハンドリングを行うということは、常に「即死」のリスクを伴うロシアンルーレットを行っているのと同義であると言える。飼育者が「自分は落とさない」と過信していても、生物の突発的な動き(ダッシュやジャンプ)は予測不可能であり、リスクを完全に排除することは不可能である。

2.2 感覚生理学とストレス反応:「懐く」という誤解

タランチュラの感覚世界は、人間とは全く異なる。彼らは視覚（明暗や動きの感知程度）よりも、体表を覆う感覚毛（トリコボスリア）による振動や空気の動きの感知に大きく依存している¹。

2.2.1 「巨大な振動する熱源」としての人間

資料³において、タランチュラにとっての人間は「世話人（Caregiver）」ではなく、「巨大な振動する熱源」であると表現されている。ハンドリング中にタランチュラが手のひらで静止している状況を、多くの初心者は「懐いている」「リラックスしている」と解釈する。しかし、生物学的な観点からは、これは以下の2つの状態のいずれかである可能性が高い。

1. 強直状態（Freeze Response）：恐怖や警戒により、捕食者に見つからないように動きを止めている状態。
2. 熱走性（Thermotaxis）：変温動物であるタランチュラが、単に暖かい場所（人間の体温）に留まろうとしている生理的反応。

人間の脈拍による微細な振動、呼吸による空気の動き、そしてハンドリング中の不安定な足場は、タランチュラにとって常に警戒すべき環境ストレスである³。息を吹きかけたり、大きな声を出したりするだけで、彼らはパニックを起し、攻撃や逃走に転じる可能性がある。

2.2.2 ストレスの蓄積と生理的悪影響

過度なハンドリングによる慢性的なストレスは、タランチュラ健康状態を著しく損なう。

- 拒食（Fasting）：安全が脅かされていると感じた個体は、摂食行動を停止することが多い。
- 自己損傷：ストレスにより過剰にグルーミングを行ったり、刺激毛を蹴りすぎて腹部が禿げ上がったりする。
- 脱皮不全：脱皮はタランチュラにとって命がけのイベントであるが、十分な体力が温存されていない場合、あるいは脱皮前のデリケートな時期にハンドリングされた場合、脱皮不全を引き起こし、脚の欠損や死亡に繋がる⁵。

2.3 成長段階とメンテナンスのリスク

幼体（スリング）から成体への成長過程においても、ハンドリングは推奨されない。幼体は身体が小さく、わずかな圧力で圧死するリスクがあるほか、動きが成体以上に予測不能で俊敏である⁵。資料¹¹にあるように、幼体からある程度のサイズ（全長8cm程度）になるまでは、プリンカップなどの管理しやすい容器で飼育し、直接触れることなく管理することが基本である。

3. 医学的・毒性学的観点に基づく人体へのリスク

すべてのタランチュラは捕食のために毒（Venom）を有している²。日本国内においてタランチュラによる死亡事故は報告されていないものの、それは「毒が弱いから」ではなく、「咬まれる頻度が極端に低い（ハンドリングを避けている）」こと、および「適切な医療介入」の結果である可能性を考慮すべきである。また、毒以外にも「刺激毛」という特有の防御機構が存在し、これが人体への最大の脅威と

なっている。

3.1 咬傷(Bite)による直接的・全身的影響

タランチュラの毒性については、種によって大きな差があるが、一般的に以下の二つのグループに大別してリスクを評価する必要がある。

3.1.1 旧世界種(Old World Species)の強力な神経毒

アジア、アフリカ、オーストラリアに生息するタランチュラ(バブーンスパイダー、アースタイガー、ポエキロテリア属など)は、腹部に刺激毛を持たない代わりに、非常に攻撃的であり、かつ強力な毒を持つように進化している¹²。

これらの種の毒は神経毒(Neurotoxin)を主成分としており、咬まれた場合、以下のような激しい症状を引き起こすことが報告されている⁶。

- 局所の激痛: 患部が焼けつくような痛み。
- 筋痙攣(Muscle Spasms): 咬まれた部位だけでなく、全身に及ぶ強い痙攣。
- 全身症状: 発熱、動悸、吐き気、めまい、呼吸困難。

資料¹²では、特にポエキロテリア属(*Poecilotheria*)について、「毒が強いと言われており、噛まれた場合のダメージはかなりのものになる」と警告している。これらの種を素手で扱うことは、医学的に見て極めて無謀であり、明確な「自殺行為」に近い。

3.1.2 新世界種(New World Species)と物理的損傷

南北アメリカ大陸に生息するタランチュラ(バードイーター等)は、比較的毒性が弱いとされるが、油断は禁物である。大型個体の鋏角(牙)は1~2センチメートルに達し、物理的に皮膚を貫通するだけで深い刺創となる²。また、傷口からの二次感染(細菌感染)のリスクも無視できない。

さらに、資料¹⁵にあるように、毒性試験はマウスに対して行われることが多く、人間に対する正確な反応は完全には解明されていない。「死亡例がない」というのは「安全である」ことの証明にはならず、未知のアレルギー反応を引き起こす可能性は常に残されている。

3.1.3 アナフィラキシーショックの脅威

ハチ毒と同様、タランチュラの毒に対しても、個人の体質によってはアナフィラキシーショック(即時型アレルギー反応)が発生する可能性がある⁹。

- 症状: 全身の蕁麻疹、血管性浮腫、気管支収縮による呼吸困難、血圧低下、意識喪失。
- リスク: アナフィラキシーは初回刺咬時よりも、複数回の接触によって感作が成立した後に発症しやすい。つまり、飼育者が日常的に世話をする中で(あるいは過去に一度咬まれた経験がある場合)、突然重篤な反応を示すリスクがある。日本国内において、タランチュラ毒に特化した抗毒素(アンチベノム)は配備されておらず、対症療法に頼らざるを得ない現状を鑑みれば、このリスクは決して軽視できない。

3.2 刺激毛(Urticating Hairs): 過小評価される最大の脅威

新世界(南北アメリカ)のタランチュラの多くは、腹部に「刺激毛」と呼ばれる微細な棘状の毛を密生させている。これは彼らにとって主要な防御手段であり、ハンドリングにおいて咬傷以上に高頻度で発

生する深刻な健康被害の原因となる²。

3.2.1 皮膚への影響とアレルギー反応

タランチュラは危険を感じると、後脚で腹部を素早く擦り、この刺激毛を空中に散布する。ハンドリング中、この毛が飼育者の手や腕に付着すると、物理的な刺激と化学的な作用により、激しい接触性皮膚炎を引き起こす。

- 症状: 耐え難い痒み、発赤、腫脹、水疱形成。
- 持続期間: 症状は数時間から数週間、場合によっては数ヶ月続くこともある²。
- 感作: 繰り返し暴露されることでアレルギー反応が悪化し、全身性の蕁麻疹などを引き起こすケースもある。

3.2.2 眼球への被害: 視力喪失のリスク

最も恐るべきは、飛散した刺激毛が眼に入った場合である。資料2では、チリアンコモン(ローズヘアー)を飼育していた米国男性の角膜に刺激毛が刺さり、半年以上も不快感が続いた事例が紹介されている。

刺激毛は微細な「返し(barb)」構造を持っており、一度組織に刺さると抜けにくく、奥へと侵入する性質がある。眼球内に入り込んだ毛は、角膜炎、虹彩炎、ぶどう膜炎、さらには網膜損傷を引き起こす可能性がある。最悪の場合、外科手術による除去が必要となるか、視力低下・失明に至るリスクがある¹³。

ハンドリング中にタランチュラが顔の近くに来る、あるいはタランチュラを顔に近づける行為(資料4で強く戒められている)は、眼球への被弾リスクを最大化させる行為である。

3.2.3 吸入による呼吸器障害

飛散した微細な毛を吸い込むことで、鼻腔、咽頭、気管支の粘膜が刺激され、咳、呼吸困難、喘息様症状を引き起こすリスクもある。

4. 日本国内における法的枠組みと社会的責任

日本においてタランチュラのハンドリングが推奨されない背景には、生物学的・医学的理由に加え、日本特有の法制度と、社会的な「責任論」が深く関与している。趣味としての飼育を継続するためには、法律の遵守だけでなく、社会的なコンセンサスを得ることが不可欠である。

4.1 動物愛護管理法における位置づけと「特定動物」指定の議論

現在、「動物の愛護及び管理に関する法律(動愛法)」において、タランチュラ(オオツチグモ科)は「特定動物(人の生命、身体又は財産に害を加えるおそれがある動物)」には指定されていない¹⁵。これは、許可やマイクロチップ装着義務なしに飼育が可能であることを意味するが、その地位は盤石ではない。

4.1.1 指定除外の経緯と「グレーゾーン」の脆弱性

環境省の資料¹⁵によると、過去に危険動物の指定範囲を検討した際、タランチュラも候補に挙がった

経緯がある。しかし、以下の理由により見送られた。

1. 致死性の証拠不足: 1800年代の古い文献を除き、現代における人間への致死例が確認できなかった。
2. 毒性情報の不確実性: 人体への影響に関する科学的データが不足しており、規制の根拠としては不十分と判断された。

重要なのは、これが「安全であるから規制しない」という積極的な保証ではなく、「規制するほどの明確な被害実績が(まだ)ない」という消極的な判断である点である。もし日本国内で、ハンドリング中の咬傷により重篤なアレルギー事故が発生したり、逃げ出した個体が子供に怪我をさせたりといった事件が起きれば、この判断は容易に覆り、特定動物への指定、あるいは事実上の飼育禁止へと規制が強化される可能性が高い¹⁵。

4.2 中野区タランチュラ遺棄事件と社会的影響

2024年3月、東京都中野区の公園において、タランチュラやサソリを含む複数の有毒生物が遺棄される事件が発生した¹⁹。

- 事件の概要: 公園の排水溝や植え込みに、タランチュラ3匹、サソリ2匹などがプラスチックケースごと、あるいは生身で投棄されていた。一部は生きていた。
- 社会的反応: この事件はテレビニュースやネットメディアで大きく報じられ、中野区は「見つけても触らないように」と防災行政無線や張り紙で注意喚起を行った。警察が出動し、犯人捜しが行われる事態となった²⁰。

この事件は、タランチュラ飼育者に対する社会の視線を厳しくさせる決定的な契機となった。ハンドリングは脱走リスクを飛躍的に高める行為である。万が一、ハンドリング中に個体を取り逃がし、それが屋外で発見された場合、たとえ意図的な遺棄でなくとも、社会的には「危険生物の管理不全」として同列に扱われ、近隣住民に恐怖を与え、警察や行政を動かす騒動となる。

資料2にあるように、「タランチュラが脱走すると近所の方を不安にさせてしまうだけでなく、生態系に悪影響を及ぼす恐れもある」。日本社会において「近隣への迷惑 (Meiwaku)」は最も忌避すべき行為の一つであり、ハンドリングによる脱走リスクは、個人の趣味の範疇を超えた反社会的行為と見なされるのである。

4.3 外来生物法との関連

現時点では、タランチュラは「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律 (外来生物法)」の指定を受けていない (ゴケグモ属などは指定済み)²³。しかし、野外への定着が懸念される場合や、在来生態系への影響が疑われる事態となれば、指定に向けた動きが加速する可能性がある。ハンドリングによる脱走は、そのトリガーとなり得る。

5. 日本独自の飼育文化と倫理: 「鑑賞」対「ふれあい」

5.1 「手乗り」文化の不在とリスク回避の国民性

日本と欧米では、エキゾチックアニマルに対する接し方に文化的な差異が見られる。欧米 (特に米

国)では、ペットとの物理的な接触(Interaction)を重視する傾向があり、ハンドリング動画がポピュラーなコンテンツとして消費される。一方、日本のテラリウム/ビバリウム文化は、盆栽や箱庭の伝統にも通じる「鑑賞」の美学が根底にある。

日本の飼育者は、生体を不必要に触るのではなく、その生態に即したレイアウト環境を構築し、自然な振る舞いを観察することに重きを置く傾向が強い。この文脈において、生体にストレスを与え、ハゲや怪我の原因となるハンドリングは、「美しくない」「未熟な」行為として認識される。

5.2 専門店のスタンスと啓蒙活動

日本のタランチュラ市場を牽引する専門店やブリーダーは、一貫してハンドリング否定の立場を取っている¹。

- 販売者責任と教育: 店側は、初心者がYouTubeなどの影響で安易にハンドリングを行おうとすることを危惧し、販売時にリスク(毒、毛、落下死、法的責任)を詳細に説明する責任を果たしている。「当店でも非推奨」と明記し、事故が起きた場合の責任所在を明確にすると同時に、業界全体の健全化を図っている¹。
- 倫理規定: 資料⁴のガイドラインでは、「あなたのペットを恐怖ではなく、尊敬を持って扱おう」という標語が掲げられている。タランチュラを恐怖させ、防御反応(咬傷や毛飛ばし)を引き出すハンドリングは、ペットに対する尊敬を欠いた行為であるという倫理観が共有されている。

6. 推奨される安全なメンテナンス手法と運用プロトコル

ハンドリングが推奨されない以上、飼育者は生体に直接触れることなく日々の管理を行う技術を習得しなければならない。以下に、日本国内で標準とされる安全なメンテナンス手法(Operational Protocols)を詳述する。

6.1 直接接触を避ける移動法(No-Touch Transfer)

生体の移動(ケージ交換、清掃、ペアリング時)には、決して素手を用いない。以下の手法が標準化されている。

6.1.1 カップ誘導法(Catch Cup Method)

最も一般的で安全な方法である⁶。

1. 準備: 生体のサイズよりも一回り大きい透明なプリンカップやプラスチック容器、および蓋を用意する。
2. 誘導: 筆(絵筆や書道筆などの柔らかいもの)、長いピンセット、あるいはストローを使用し、タランチュラの後脚やお尻を優しく刺激(タップ)する。タランチュラは刺激と逆方向に前進する習性があるため、これをコントロールして移動させる。
3. 捕獲: 進行方向にカップを配置し、生体が入ったところで速やかに、かつ慎重に蓋をする。この際、脚や鉗角を容器の縁に挟まないよう細心の注意を払う。
4. 移動: 新しいケージ内にカップを置き、蓋を開けて自発的に出てくるのを待つか、再びお尻を刺激して退出させる。

6.1.2 袋包み法 (Bagging Method)

特に動きの速い旧世界種(ポエキロテリア属など)や、攻撃性の高い個体を扱う際に有効な方法である⁴。

1. 手順: 大きな厚手の透明ビニール袋の中に、飼育ケースごと手を入れる、あるいは飼育ケースを袋で包み込む。
2. メリット: 万が一、ケースから飛び出しても袋の中に留まるため、部屋中への脱走(部屋んぼ)を防ぐことができる。この状態でカップ誘導法を併用するのが最も確実である。

6.2 給水と湿度の管理: 刺激を与えない工夫

メンテナンス時の刺激を最小限に抑えることも、事故防止の観点から重要である。

- 洗淨瓶の活用: 多くの飼育マニュアルにおいて、霧吹き(スプレー)の使用は推奨されない場合がある¹¹。霧吹きの風圧や微細な水滴の飛散は、タランチュラを驚かせ、パニック(ダッシュ)を誘発するからである。
- 代替手段: 代わりに、実験器具の「洗淨瓶」や水差しを用い、床材に静かに水を注ぐ方法が推奨される。これにより、生体に直接水をかけず、かつ驚かせずに湿度環境を維持することが可能となる。

6.3 脱走防止と危機管理 (Crisis Management)

- 二重管理: メンテナンス作業は、閉め切った部屋で行い、さらに万が一の落下に備えて低い位置(床に座った状態)で行う。可能であれば、大きな衣装ケースの中で作業を行うことで、脱走時の捕獲範囲を限定する¹²。
- ケージの選定: タランチュラは脱走の名人である。蓋が確実にロックできる専用ケージを使用し、通気孔のサイズが適切か(幼体が通り抜けないか)を確認する²。
- 緊急時の対応: 万が一脱走した場合や咬まれた場合に備え、捕獲用カップを手元に置くこと、および医療機関の連絡先を把握しておくことが推奨される⁴。

7. 結論: なぜ日本においてハンドリングは「悪」とされるのか

以上の調査・分析より、日本国内においてタランチュラのハンドリングが推奨されない理由は、単一のリスク要因によるものではなく、生物学的、医学的、法的、そして社会的な要因が複雑に絡み合った結果としての「合理的結論」であることが明らかとなった。

1. 生物学的必然性: タランチュラの身体構造は落下衝撃に極めて脆弱であり、ハンドリングは常に「腹部破裂による死」のリスクを伴う。また、「懐く」ことはなく、人間との接触は彼らにとってストレス以外の何物でもない。
2. 医学的防衛: 刺激毛による眼球への不可逆的な障害リスク、および毒によるアナフィラキシーショックのリスクから、飼育者自身の健康を守る必要がある。
3. 社会的・法的生存戦略: 日本の法規制(動愛法・外来生物法)の現状は、事故がないことによって辛うじて保たれている均衡状態にある。中野区での遺棄事件が示したように、社会は有毒生

物の逸出に対して極めて敏感であり、ハンドリングによる脱走や咬傷事故は、趣味そのものの存続を脅かす規制強化の引き金となり得る。

したがって、日本における「ハンドリング厳禁」という規範は、単なる過剰な心配性ではなく、「愛好家自身」「飼育される生体」、そして「社会の安全」の三者を守るための高度なリスク管理プロトコルとして機能している。

欧米の文化を無批判に受容するのではなく、日本の住環境や法制度、社会的価値観に適合した「観察重視」のスタイルこそが、日本においてタランチュラ飼育を持続可能なものにする唯一の道であると結論付けられる。

表1: タランチュラ飼育におけるリスク要因とハンドリングの影響比較

リスク分類	具体的な脅威内容	ハンドリング時のリスク増大度	メンテナンス時(非接触)
生体への物理的損傷	落下による腹部破裂、即死	極大(高所からの落下リスク常在)	低(低い位置・容器内作業で回避可)
生体の生理的ストレス	拒食、脱毛、成長阻害	高(体温・振動・不安定さによる恐怖)	低(必要最小限の移動)
人体への毒性被害	咬傷(神経毒、物理的損傷)、アナフィラキシー	高(至近距離での接触、防御反応誘発)	低(道具使用により距離を確保)
人体への物理的被害	刺激毛の刺入(皮膚炎、角膜炎、呼吸器障害)	極大(腹部を蹴る動作を至近距離で受ける)	中(飛散リスクはあるが回避容易)
社会的・法的リスク	脱走、近隣トラブル、警察沙汰、法規制強化	極大(制御不能なダッシュ、屋外逸出)	低(二重管理下での制御)

表2: 新世界種と旧世界種の危険性プロファイル

種別グループ	代表種	主な防御手段	ハンドリングに対する適性	日本での一般的評価
新世界種 (New)	メキシカンレッド	刺激毛(吸入・	一見大人しい	初心者向けとさ

World)	ニー チリアンコモン	接触) 比較的弱い毒	が、刺激毛のリスクが極めて高い	れるが、ハンドリングは刺激毛被害のため非推奨
旧世界種 (Old World)	コバルトブルー オレンジバブーン ポエキロテリア属	強力な毒(神経毒) 俊敏な動き、威嚇	攻撃性が高く、咬まれれば重篤な症状。 制御不能な速度で動く。	絶対厳禁。 熟練者でも細心の注意を払う対象。

(本報告書は、提供された調査資料¹～¹⁹に基づき、エキゾチックアニマル・リスク管理および動物愛護法の専門家の視点から包括的に作成されました)

引用文献

1. タランチュラ用語集 | 奇蟲屋 榊(タランチュラ通販店), 1月 10, 2026にアクセス、
<https://spider-sakaki.square.site/s/stories/yougo>
2. 実はペット向きなタランチュラ！ 飼い方のコツや人気の種類、毒性などを紹介, 1月 10, 2026にアクセス、<https://magazine.cainz.com/article/112516>
3. ハンドリング？ : r/tarantulas - Reddit, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://www.reddit.com/r/tarantulas/comments/aod935/handling/?tl=ja>
4. タランチュラをペットにいかが？ 八幡明彦, 1月 10, 2026にアクセス、
<http://spider.art.coocan.jp/studycenter/pdf/yawatapet.pdf>
5. 冬場のタランチュラの発送方法 - 奇蟲屋 榊, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://spider-sakaki.square.site/s/stories/tarantulainwinter>
6. タランチュラ飼育についてよく来る質問 - 虫の森, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://xn--u9j241ospt.com/%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%A9/%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%81%AE%E3%82%88%E3%81%8F%E3%81%82%E3%82%8B%E8%B3%AA%E5%95%8F/>
7. これはバカな質問かもしれないけど、タランチュラって本当にデリケートなの？例えば、3フィートくらいから落としたら死んじゃうとか、乱暴に扱ったら外骨格が壊れちゃうとか？ : r/tarantulas - Reddit, 1月 10, 2026にアクセス、
https://www.reddit.com/r/tarantulas/comments/11dtukc/this_might_be_a_stupid_question_but_are/?tl=ja
8. 虫って落下ダメージ受けるの？ : r/TooAfraidToAsk - Reddit, 1月 10, 2026にアクセス、
https://www.reddit.com/r/TooAfraidToAsk/comments/ubka2j/do_insects_take_fall_damage/?tl=ja
9. Theraphosa(テラフォサ)属の飼育方法 | 奇蟲屋 榊(タランチュラ通販店) - Square, 1月 10, 2026にアクセス、<https://spider-sakaki.square.site/s/stories/theraphosa>

10. よくある質問 | 奇蟲屋 榊(タランチュラ通販店) - Square, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://spider-sakaki.square.site/s/stories/qa>
11. タランチュラベビーの飼育方法 - 虫の森, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://xn--u9j241ospt.com/%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%A9/%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%83%99%E3%83%93%E3%83%BC%E3%81%AE%E9%A3%BC%E8%82%B2%E6%96%B9%E6%B3%95/>
12. Poecilotheria(ポエキロテリア)属の飼育方法 | 奇蟲屋 榊(タランチュラ通販店), 1月 10, 2026にアクセス、<https://spider-sakaki.square.site/s/stories/poecilotheria>
13. クモ咬傷 - 22. 外傷と中毒 - MSDマニュアル プロフェッショナル版, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://www.msdmanuals.com/ja-jp/professional/22-%E5%A4%96%E5%82%B7%E3%81%A8%E4%B8%AD%E6%AF%92/%E5%88%BA%E5%92%AC%E7%97%87/%E3%82%AF%E3%83%A2%E5%92%AC%E5%82%B7>
14. テキサスタランチュラの有害な影響 - Picture Insect, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://pictureinsect.com/ja/harmful/Aphonopelma-anax.html>
15. 第1回特定外来生物等分類群専門家グループ会合(無脊椎動物)議事概要 - 環境省, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://www.env.go.jp/nature/intro/4document/data/sentei/inverte01/indexa.html>
16. 特定動物の飼養 - 北海道オホーツク総合振興局, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kks/tokutei.html>
17. 特定動物のリスト, 1月 10, 2026にアクセス、
https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/1903/pdf/19.pdf
18. 特定動物リスト [動物の愛護と適切な管理] - 環境省, 1月 10, 2026にアクセス、
https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/1_law/sp-list.html
19. 中野区の公園でタランチュラ・サソリなど6匹投棄 大量の虫かごも...なぜ - TOKYO MX, 1月 10, 2026にアクセス、<https://s.mxtv.jp/tokyomxplus/mx/article/202403211120/>
20. 中野の公園でタランチュラ・サソリなど6匹投棄 / 6 tarantulas, scorpions, etc. dumped in a park in Nakano - YouTube, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://www.youtube.com/watch?v=Ck9kz0wZT7A>
21. 中野区の公園でタランチュラ・サソリなど6匹投棄 大量の虫かごも...なぜ | TOKYO MX+ (プラス), 1月 10, 2026にアクセス、
<https://s.mxtv.jp/tokyomxplus/mx/article/202403211120/detail/>
22. 排水溝に“タランチュラ” 散歩の女性が発見 - YouTube, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://www.youtube.com/watch?v=EsEQSXpeRa0>
23. 人の生命や身体に被害を及ぼす虫たちーヒアリ、セアカゴケグモ、ダニ類などー, 1月 10, 2026にアクセス、<https://www.jesc.or.jp/library/tabid/359/Default.aspx>
24. タランチュラの飼育方法 - 虫の森, 1月 10, 2026にアクセス、
<https://xn--u9j241ospt.com/%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%A9/%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%81%AE%E9%A3%BC%E8%82%B2%E6%96%B9%E6%B3%95/>